初修外国語教育部

■ 2013 年度

横浜国立大学における初修外国語教育の現状

１．概観

まず最初に、横浜国立大学（以下、本学という）における外国語教育がどのように運営されているかを概括的に説明しておこう。

▼ 【開講科目】

本学では、以下の 10 言語が教養教育「外国語科目」のカテゴリーのもとに開講されている。すなわち、①英語、②ドイツ語、③フランス語、④中国語、⑤ロシア語、⑥朝鮮語、⑦イスパニア語、⑧ギリシア語、⑨ラテン語、⑩日本語　である。

▼ 【運営を担う部署、履修選択の範囲】

2013 年度までは、上記の①英語および⑩日本語を除く諸言語のうち、②ドイツ語、③フランス語、④中国語、⑤ロシア語、⑥朝鮮語、⑧ギリシア語、⑨ラテン語の 7 言語は、教育人間科学部・教養教育委員会の下におかれた外国語教育小委員会が統括し、さらにその下におかれた各言語作業部会が運営実務に当たっていた。これに対し、⑦イスパニア語については、経済学部が運営業務を担っていた。⑩日本語については、留学生センターが運営責任を担ってきた。2014 年度からは、こうしたすべての語学科目の運営が、国際戦略推進機構基盤教育部門に統合される。

学部ごとに、履修できる言語を限定している場合がある。②ドイツ語、③フランス語、④中国語、⑤ロシア語、⑥朝鮮語、および⑦イスパニア語の 6 つの言語は、どの学部の学生も等しく選択し・履修することができるが、⑧ギリシア語、⑨ラテン語を卒業に必要な単位として履修できるのは、教育人間科学部の学生のみである。日本語を外国語科目として履修できるのは、いずれの学部でも外国人留学生に限られている。

▼ 【初修外国語教育の基本方針】

上に挙げた諸言語のうち、日本語・英語は、一般の学生にとって、初めて学習する言語ではない。これに対して、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、朝鮮語、イスパニア語、ギリシア語、ラテン語は、大学入学後に入門段階から学習しはじめることになる。これらの言語を、本学では「初修外国語」と呼んでいる。

本学の初修外国語教育は、2013 年度まで、主に教育人間科学部が開講責任を負う形で、

ほぼ（イスパニア語を除けば）一元的な運営体制をとってきた。その体制の下で、本学の初修外国語教育においては、明文化されてはいないが、以下のような基本方針をもって、充実した教育を提供するよう努めてきた。

１）大学以外では学びにくい、多様な言語に出会う機会を提供すること。
・近隣諸国の言語（中国語、朝鮮語、ロシア語）。
・有力な文化学術言語（ドイツ語、フランス語）。
・使用者数の多い言語（中国語、イスパニア語）
・教養を高める古典言語（ギリシア語、ラテン語）
２）各言語について入門・初級・中級の体系的なカリキュラムを整備すること。
３）学習者が学びたい言語を学べるようクラスを提供すること。
４）異文化に触れ、留学生との交流や海外留学への関心を喚起すること。

２．開講クラス数と受講者数　―　初級段階クラスの比較

▼ 下に掲げる表 1、表 2 は、2005 年度から 2013 年度までの 9 年間について、初修外国語のクラスが開講されていた数の変化を表している。ただし、言語によって中級段階のクラスが全くもしくはごく少数しか開講されていない場合もあるため、ここでは、比較可能な初級段階のクラス（現在の「〇〇語実習 1)「〇〇語実習 2」にあたるもの）の数値を対象とした。

（表 1）初修外国語開講クラス数（初級段階）の推移（2005～2013 年度）

開講クラス数	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	78	74	68	66	60	58	57	50	52
中国語	80	88	100	104	104	101	104	95	96
フランス語	26	22	20	14	18	16	14	14	14
ロシア語	4	4	4	6	12	12	14	16	16
朝鮮語	4	6	6	8	10	10	12	12	12
イスパニア語	6	6	4	4	4	4	4	4	4
ギリシア語	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ラテン語	2	2	2	2	2	2	2	2	2
総数	202	204	206	206	212	205	209	195	198

（表 2）初修外国語開講クラス数割合の推移（2005～2013 年度）

開講数の割合	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	39%	36%	33%	32%	28%	28%	27%	26%	26%
中国語	40%	43%	49%	50%	49%	49%	50%	49%	48%
フランス語	13%	11%	10%	7%	8%	8%	7%	7%	7%
ロシア語	2%	2%	2%	3%	6%	6%	7%	8%	8%
朝鮮語	2%	3%	3%	4%	5%	5%	6%	6%	6%
イスパニア語	3%	3%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%
ギリシア語	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
ラテン語	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%

これに対して、下に掲げる表 3 は、初級段階の各言語の受講者の数の変化を示すものである。各年度の人数は、春学期・秋学期の受講者数を合算した延べ人数である。実際の学生数は、それぞれ半数程度と考えるべきであろう。

（表 3）初修外国語受講生数の推移（2005～2013 年度　春秋学期の延べ人数）

受講生数	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	2823	2838	2774	2917	2574	1953	1967	2081	2243
中国語	4058	4440	4316	3997	4012	4529	4880	4537	4062
フランス語	629	602	444	472	436	422	434	373	417
ロシア語	48	67	41	72	135	105	151	134	247
朝鮮語	130	198	147	198	129	191	270	299	251
イスパニア語	151	149	126	84	99	73	93	59	103
ギリシア語	15	13	6	13	9	6	7	7	10
ラテン語	16	10	11	13	10	11	9	14	12
総数	7870	8317	7865	7766	7404	7290	7811	7504	7345

また下の表 4 は、初修外国語全体に対する各言語受講者の占める割合を示している。

（表 4）初修外国語受講生数割合の推移（2005～2013 年度）

受講生割合	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	36%	34%	35%	38%	35%	27%	25%	28%	31%
中国語	52%	53%	55%	51%	54%	62%	62%	60%	55%
フランス語	8%	7%	6%	6%	6%	6%	6%	5%	6%
ロシア語	1%	1%	1%	1%	2%	1%	2%	2%	3%
朝鮮語	2%	2%	2%	3%	2%	3%	3%	4%	3%
イスパニア語	2%	2%	2%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
ギリシア語	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
ラテン語	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

次に、表 5 は、それぞれの言語のクラスについて、平均クラス規模を算出したものである。

（表 5）初修外国語の平均クラス人数の推移（2005～2013 年度）

平均クラス規模	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	36.2	38.4	40.8	44.2	42.9	33.7	34.5	41.6	43.1
中国語	50.7	50.5	43.2	38.4	38.6	44.8	46.9	47.8	42.3
フランス語	24.2	27.4	22.2	33.7	24.2	26.4	31.0	26.6	29.8
ロシア語	12.0	16.8	10.3	12.0	11.3	8.8	10.8	8.4	15.4
朝鮮語	32.5	33.0	24.5	24.8	12.9	19.1	22.5	24.9	20.9
イスパニア語	25.2	24.8	31.5	21.0	24.8	18.3	23.3	14.8	25.8
ギリシア語	7.5	6.5	3.0	6.5	4.5	3.0	3.5	3.5	5.0
ラテン語	8.0	5.0	5.5	6.5	5.0	5.5	4.5	7.0	6.0
総数	39.0	40.8	38.2	37.7	34.9	35.6	37.4	38.5	37.1

上に掲げた 5 つの表から、この 9 年間の推移について、いくつかの特徴を読み取ることができる。

▼ 【総クラス数の推移】

まず、各言語を合計した総クラス数については、やや減少傾向がみられるものの、約 200 クラス程度の水準で推移している。

▼ 【中国語とドイツ語の関係】

各言語の状況をみると、特に受講者が多いのは、ドイツ語と中国語である。いま、本学の過去の記録を詳細･完璧にたどることはできないが､おそらく 2000 年前後のある時点で、伝統的に最も受講者の多かったドイツ語を抜いて、中国語の受講者数が最多となったようである [1]。詳細な記録が残る 2005 年度この 2 言語で比べると、2005 年段階では、まだこの受講者数の変化に開講クラス数を対応させきれていなかった。中国語はすでに、ドイツ語より 1000 人以上多い受講者を有し、その割合は 52％対 36％であったが、ほぼ同数のクラスが開かれていた（80 クラス対 70 クラス）。この問題は、現在ではほぼ解決され、一クラスあたりの平均受講者数（表 5）を見ても、2013 年度では、この二つの言語はおおむね同じ程度のクラス規模となっている（ドイツ語 43.1 人に対し中国語 42.3 人）。

▼ 【開講クラス数の移動】

各言語間のクラス数の移動を見てみよう。この 9 年間にクラスが減少している言語は、ドイツ語（26 クラス減）、フランス語（12 クラス減）である。これに対してクラス数が増加している言語は、中国語（16 クラス増）、ロシア語（12 クラス増）、朝鮮語（8 クラス増）となっている。

こうした変化の原因は、まず、上に述べたように、中国語とドイツ語の開講クラス数の不均衡を是正する必要があったことである。

また、ロシア語・朝鮮語については、従来 4 クラス程度の開講にとどまり、潜在的な需要に応ずることができなかった状況を改善する必要があったことにもよっている。しかしこの間、ロシア語・朝鮮語クラスを積極的・重点的に開講してきたことにより、ロシア語では約 3〜5 倍、朝鮮語でも約 2 倍の受講生が集まるように変化してきた。

▼ 【初修外国語の二極分化】

また、初修外国語が、とくに開講クラス数について、大規模言語と小規模言語の二つのグループに分化する趨勢が読み取れる。

第一は、中国語、ドイツ語である。第二は、フランス語、ロシア語、朝鮮語、イスパニア語である。第一グループの中国語・ドイツ語に比べて、第二グループの 4 つの言語は、開講されるクラス数が圧倒的に少なく、受講生も少ない＊。

＊2013 年度現在、フランス語・ロシア語・朝鮮語・イスパニア語は、それぞれ 14 クラス、16 クラス、12 クラス、4 クラスが開講されている。これに対し受講生数は、417 人、247

[1] 朝日新聞によると、文部科学省は、どの外国語をいくつの大学が提供しているかを把握しており、「英語以外では中国語が 03 年度にドイツ語を抜いてからずっと首位」であるという。朝日新聞 2014 年 1 月 8 日「(ニュースQ3) 独仏の影薄く、中国も陰り…… いえ、第二外国語の話」。

人、251 人、103 人である。また、平均クラス規模は、29.8 人、15.4 人、20.9 人、25.8 人である。

どれくらいの数のクラスを開講するべきかを考える際に、目安の一つとして、平均クラス規模を比較することができる。第一グループの中国語・ドイツ語のような大規模言語の場合、平均クラス規模は約 40 人であり、今後もこの水準に収まるように調整することが現実的であろう。しかし、第二グループの小規模言語の場合、同じような「1 クラス 40 人」を目安とするのは困難であり、平均約 30 人のクラス規模を目指すのが適切であろうと思われる。

開講数と受講者数を比較した効率性に着目すると、小規模言語のうち、フランス語は 14 クラスの開講で 400 人を超える受講生を集めており、非常に効率的な運営が行われていると評価することもできる。ロシア語・朝鮮語については、残念ながら、フランス語と同程度の開講数に対して半分程度の受講生しか集められていない。

３．中級段階のクラスについて

▼ 上記【初修外国語教育の基本方針】に述べたように、本学では、いずれの言語を選択した場合でも、原則として「入門・初級・中級の体系的なカリキュラム」で学習することが可能になるように、教育環境を整えるよう努力している。

教育人間科学部外国語教育小委員会では、大学入学後に初めて習う初修外国語を、一定程度の実用レベルの運用できるように修得するためには、中級段階のクラスを履修することが望ましいと考えている。それによって、初級段階の知識・技能を定着させることができるとともに、学生の自主的・自立的学習を促し、短期派遣留学を希望する学生を増やし、学外の外国語検定試験の受験を奨励することにつながると期待されるからである。

ただし、各学部で定める「教養教育履修基準」では、現在のところ、初級段階（「実習」）の 4 単位を越えて中級に進むことを、規則という形で事実上奨励しているのは、経営学部のみである＊。

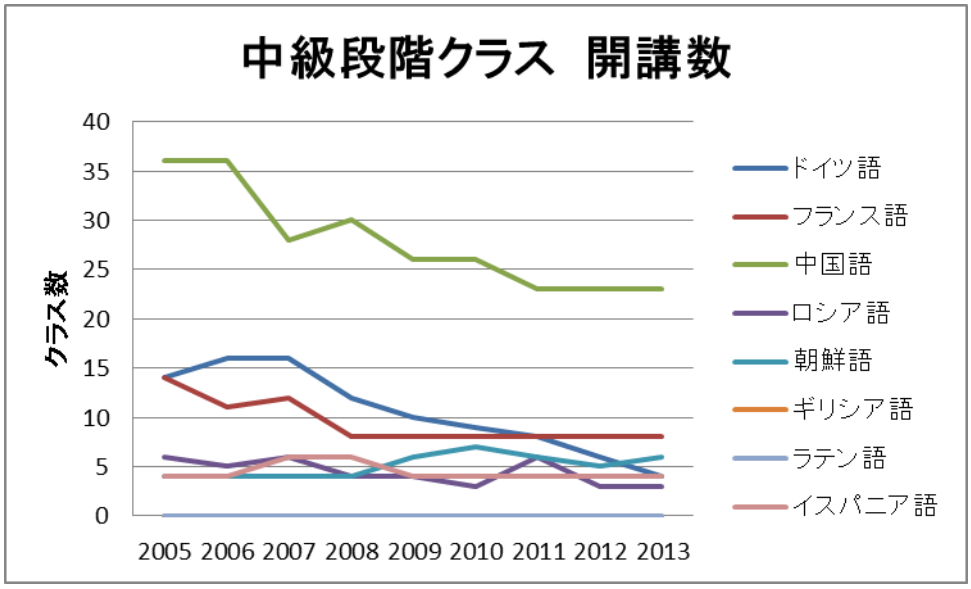
＊経営学部は外国語科目を 14 単位修得することを義務付けており、その内訳として、英語 8 単位(実習 6＋演習 2)に加えて「英語以外 1 または 2 外国語」を選択し 6 単位以上を修得することを定めている。つまり、「英語以外の外国語」を 1 つ選ぶとき、初級段階の 4 単位を越えて、最低でも 2 単位の中級段階クラスを受講する必要があることになる。他の学部では、英語と組み合わせた場合、初修外国語の履修を初級段階の 4 単位で終えても卒業に

支障が生じないため、多くの場合、初級段階でその外国語の学習を止めてしまうことにつながっている。

（表 6）中級段階の開講クラス数の推移（2005 年度～2013 年度）

中級・クラス数	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	14	16	16	12	10	9	8	6	4
フランス語	14	11	12	8	8	8	8	8	8
中国語	36	36	28	30	26	26	23	23	23
ロシア語	6	5	6	4	4	3	6	3	3
朝鮮語	4	4	4	4	6	7	6	5	6
ギリシア語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ラテン語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イスパニア語	4	4	6	6	4	4	4	4	4
	78	76	72	64	58	57	55	49	48

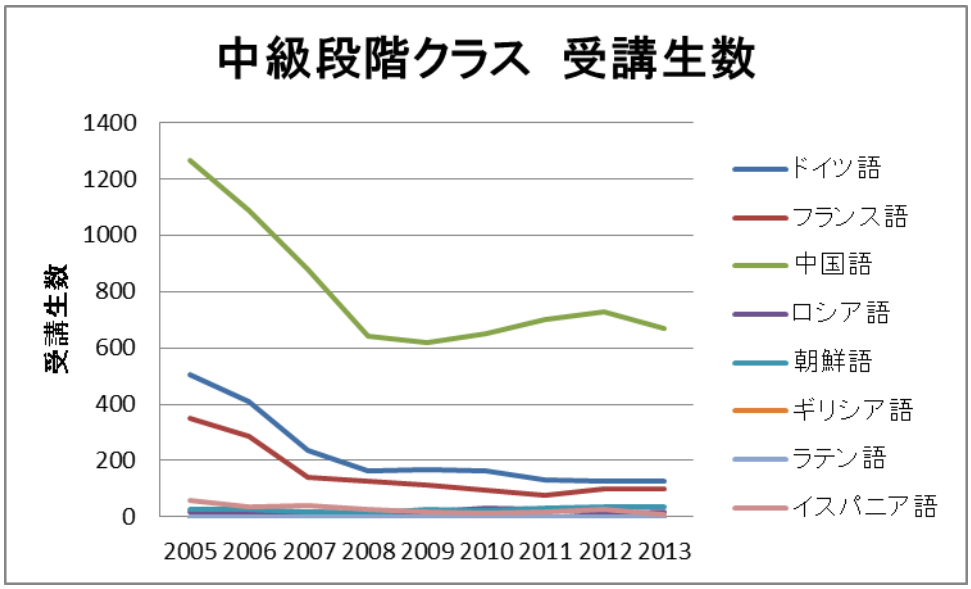
（グラフ 1）中級段階クラス開講数の推移（2005 年度～2013 年度）



（表 7）中級段階の受講者数の推移（2005 年度～2013 年度）

中級・受講者数	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
ドイツ語	505	408	235	165	170	163	132	127	127
フランス語	350	288	142	129	113	93	77	99	99
中国語	1268	1089	878	642	617	651	700	728	667
ロシア語	16	13	16	15	16	33	25	15	18
朝鮮語	28	25	19	13	25	23	30	34	36
ギリシア語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ラテン語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イスパニア語	59	37	39	28	19	15	16	28	10
	2226	1860	1329	992	960	978	980	1031	957

（グラフ 2）中級段階クラス　受講者数の推移



2006 年度に教養教育が改革され、中でも外国語科目において、中級段階に当たる「○○語演習」が、従来の 1 単位科目から 2 単位科目に変更された。これは、言語学習における中級段階に必要とされる学生の学習密度をより正確に反映させた措置であったが、その反面で、一クラスにつき従来の 2 倍の単位が与えられることになったため、中級段階の受講生数が減少し、クラス数もほぼ半減することになった。

初級段階では、大規模言語と小規模言語への「二極分解」の傾向を指摘したが、この中級段階では、表 6、とくにグラフ 1 から分かるように、中国語への「一極集中」の傾向が

進んでいて、ドイツ語も他の諸言語とほとんど変わらない開講数となっている。つまり、外国語に関して「英語と英語以外」という分け方が行われているが、この中級段階に注目するとき、初修外国語も「中国語とそれ以外」という二グループに分けて考えなければいけない状況にある。

学生の側から考えると、開講クラス数がある程度以下になると、専門教育の必修科目等の関係で、中級段階のクラスを取りたい希望があっても履修登録することができない、という場合も多く生じてくると考えられる。

現状のまま推移すると、本学では、「中級段階まで進みたい」という希望をもつ学生にとって「中国語以外に選択肢がない」という事態になっていく可能性が高い。「入門・初級・中級の体系的なカリキュラムを整備する」という基本的な方針が有名無実化することが懸念される。

４．まとめ

本学では、冒頭に掲げた基本方針、すなわち①多様な言語に出会う機会の提供、②入門・初級・中級の各段階の体系的なカリキュラムの整備、③学習者の希望に応じたクラス提供、④異文化の理解、海外留学への関心の喚起、をもとに、初修外国語教育の充実に取り組んできた。近年、2006 年度の教養教育改革、2011 年の学部改編を経て、カリキュラムも変わり、初修外国語を担当する教員の組織体制も変化してきた。

こうした変化のうち、もっとも顕著なものは、受講者数・クラス数ともに中国語が圧倒的になってきたことである。この「中国語への一極集中」の傾向は、初級段階よりもとくに中級段階において顕著である。

近年、国際情勢は激しく変動している。その影響を受けて、近隣諸国に対する学生の関心も変化し、学生たちが学ぶことを希望する外国語科目にも移り変わっている。

大学教育は、荒海のように変化する社会経済に対応することのできる人材を育成する。教養教育は、北極星のように変わらない価値と出会う場を提供する。教養教育の一部分をなす初修外国語教育は、スキルの教育として、変化する社会の動向に即応する柔軟性が求められると同時に、人格の教育として、近視眼に陥らない国際的な視野と言語力を備えた人材の養成のために、寄与することが求められている。

（山本泰生）